

美しき清流は太古の森の雫より

第十話：秋川伝統 落鮎サクリ漁（十字架編）

引田橋より遠く六枚屏風を見つめても、鮎師達が鋭角に竿を立てている姿を見つけることもなくなり、橋の上空にはどこまでも高い底抜けの秋空が連なっていた。

いわし雲は緩やかに北東に流れ、一の谷の田んぼには刈り取られた稲穂が規則正しく櫓干にされていた。

この川で青年期を過ごした鮎達も、種の保存の法則に則り最終章に向けて川を下りだします。産卵を控えて中流域を目指して川を下る落鮎の季節になると、秋川では伝統のサクリ漁が始まります。

大人に混じり「チャラ三郎」も見様見真似でサクリ竿を片手に箱眼鏡を啜えて川に潜り鮎の動きを追いかけたものでした。

引田橋の100m程下流のサマーランド側は流れの速い一本瀬となっていたこともあり十字型をした波消しブロックが護岸に設置されていました。

川底はナメ滞状の岩盤底になっており大鮎の潜むポイントでもありました。「チャラ三郎」はこの急瀬で大鮎をサクリれるようにと練習したものでした。どこの家の子供達も、それぞれの目標をもち、いつの間にかサクリ上手な秋川原人となり、伝統漁法は必然的に引き継がれてきました。



しかしながら、昭和40年頃を境に河川工事が進み、堰堤により早瀬がなくなると、子砂利底の平瀬ばかりの川へと変貌していきました。経済成長に伴い川は急速に汚れ多くの川魚が姿を消していきました。

川が汚れると、人は川から遠ざかり、いつの間にあきる野の里山からサクリ漁を楽しむ景観も失われていきました。

しかし、近年サクリ漁を復活させるべく昔のこども達が立ち上がり、懐かしい光景が帰ってきたのです。

サクリ漁は鮎の習性を良く知り、俊敏に泳ぐ鮎を瞬時に引っ掛ける超高難度の技術を要する漁です、この醍醐味はやったものでしか分り得ないものですが、あきる野に生まれ育ったものであれば、必ずや潜在能力はあるはずです。



代々継承されてきたサクリ漁を、次の世代に伝える大切な役割を、自分世代で閉ざすことなく継承することが大切であり「チャラ三郎」も大先輩達といっしょに初秋の秋川の流れに交わり、大鮎の動きを追いかけていきます。



10月も終わろうとする網元前で最後の漁をと大勢の秋川原人が集います。

網本前は昨年、一昨年と尺鮎が多く釣れた場所でもあり誰もが大鮎を期待していました。

「チャラ三郎」も期待しながら水中を這うように上流へと押し上げていきます。
ハヤに混じり、数匹の鮎が逃げ場を失いかけてサクリ師達の前に飛び出してきました。

「出たぞ！」

「そっちにいったぞ！」

サクリ師の右手が小気味よく引かれると鮎達も御用！

更に、上流へと押し上げますが今年は尺鮎の姿を見る事はありませんでした。

一方、網元前ではカジカやオコトを数匹確認することができました。

川が少しずつ自然を取り戻してきている気がしました。

美しい自然、守ろう清流

「秋川チャラ三郎」